

紅い華のデジャヴュー

登場人物

明蘭(めいらん)	南蹄山の聖女と呼ばれた娘
天豹(てんぴょう)	鑑の浜のならず者
儀傑(ぎけつ)	天豹を懲らしめる若者
爺さん(じいさん)	信心深い、年離れた漁師
虚雷(きらい)	天豹の子分
蓮花(れんか)	虚雷の妹
東能化(のうげ)	地藏菩薩の見習い
西能化(のうげ)	地藏菩薩の見習い
山本(やまもと)	現代に生まれ変わった天豹
明子(あきこ)	現代に生まれ変わった明蘭
船頭(せんどう)	明子の父親

とある無人島の浜辺。渡し船の若い客山本と中年の船頭、下手より登場。山本の手にはセカンドバッグ。船頭も山本のスーツケースを持っている。波の音が聞こえ、カモメが鳴いている。

船頭 ないでて良かった。この時期は荒れることが多いから。

山本 白い波、青い空、雑誌で見たまんまですよ。日本にもこんなところがあるんですね。

船頭 ここはもう、沖縄より台湾の方が近いんだよ。

山本 へえー本当ですか。水平線がきらきら輝いてて、綺麗だ。

船頭 しかし、おたくも変わってるね。釣りをするわけでもないのに一人でこんな島に渡って何が面白いんだか。

山本 息抜きですよ。自然のない東京で、毎日机の上の書類ばかり見て暮らしていると心まで近眼になってしまうようです。

船頭 本当に六時でいいの。二時間もあつたら一回り出来る島だからすぐに飽きちまうよ。

山本 大丈夫です、ぶらぶらしてますよ。

船頭 そう。予報じゃ時化は来ないと言つてたけど海の天気はきまぐれだから、あてにはならない。荒れる時は少し遅れるかもしれないけど、雨でも降つたらこの先の岩場に水神様祀つた祠があるから、中に入って待つててよ。

山本 ありがとうございます。船頭さん、先にお代を払つておきますよ。

船頭 渡し船の手間は帰りに貰つてるんだ。でないと客は迎えが来るかどうか心配になるだろ。

山本 そうなんですか。いや、でも払っておきますよ。それに二、三日だったら忘れてもらつても構いません。

船頭 え、

山本

先を急ぐこともない旅だからのんびりしてます。

船頭

面白いこと言う人だ。ほんじゃあ（山本が差し出した金を見て）こんなに貰う訳にはいかないよ。

山本

取っついてください。持っても仕方のない金だから。

船頭

：持っても仕方ないって…あんた、まさかおかしなこと考えてるんじゃないだろうね。

山本

やだなあ、そういう意味じゃなくて、泡銭って奴なんですよ、株で儲けて。ずっとサラリーマンの儉しい生活でしたからね。一度ばあつと使ってみたくてこんな旅を思い立ったんです。だから遠慮なく取っついてください。

船頭

本当に、いいの。

山本

どうぞ。

船頭

悪いな。じゃあ遠慮なく。

山本

あ、それからこの手紙。(セカンドバッグから取り出し) 港で出すつもりで忘れてしまったんで、出しておいてもらえますか。

船頭

…あんた、やっぱり、

山本

まいったな、だからそんなんじゃないですよ。この顔がそんな思い詰めた顔に見えますか。

船頭

(山本の顔をしばらく見つめ、笑う)そうは見えないな。

山本

久しぶりにストレスから解放されて、生きてるって実感をこの上なく感じてるんですから。

船頭

勘繰って悪かったよ。時々身投げなんかもあるもんだから、勘弁してよ。じゃあまた後で。

山本
お願いします。

船頭下手に退場。スーツケースの上に腰を下ろす山本、波の音に耳を傾ける。

山本

不思議なもんだな。こうしていると東京での生活も会社のこと、みんな現実じゃないような気がしてくる。眩しいなあ。：：：。空気がこんなに旨いなんて知らなかった。：：。皮肉だよな、今更別の生き方もあったかも知れないなんて思えてくる。：：。(セカンドバッグから白い錠剤の入った瓶を取り出し見つめる) 急ぐこともないか(瓶を脇に置いて)最後までいうのはもう少し緊張するのかなって思ってたけど、何だかこの半年で一番穏やかな気持ちだな。(水平線を見つめる山本。ふと傍らの赤いハイビスカスに気づく。砂の上の落ちていた花を手にとる)：：。ハイビスカス。：。ずつと昔、こんな景色の中にいたような気がする。：。何だか随分、遠い昔に……。

転)

(暗

黄泉の国。下役の六道能化、詠を吟じている。背後には罪人の行状を書いた本の山。

西能化 六道界の底の底、奈落の淵は澄みたるや。

東能化 炎熱、叫喚、無間、黒繩、地獄の煙に澱むなり。

西能化 六根罪障限りを尽くし、現の衣剥がれたる、

東能化 鬼畜亡者の果つるまで、

西能化 澄みたる例なかりけり。澄みたる例なかりけり。

東能化 ふうく、今夜は喉の調子も最高。

西能化 ねえ、ちよつと見習いさん、見習いさん。

東能化 はあ？

西能化

そんなふうには酔い痴れて歌うのはやめてくんない。ハーモニーつてものがあんだからさ。ハーモニー、分かってんの見習いさん。

東能化

見習い見習いって良く言うわね。自分だって見習いじゃないの。それに何がハーモニーよ、そっちが声量もないのに声張り上げて歌うから、音がはずれてて合わせられる訳ないっつもの。

西能化

はずしてるのはそっちでしょ、使い古した雑巾みたいな経帷子に興味の悪いアクセサリーチャラチャラぶら下げて。

東能化

ナスビ顔に唐辛子みたいなその烏帽子の方が、よっぽど悪趣味だと思っけど。

西能化

ナスビく、

東能化

あら、ナスビは勿体ないくらいよ。匂ってくるよな田舎

臭さは、むしろラッキョの古漬け。

西能化

くゝ口の悪い能化ね。それが仮にも五十年も先輩のあたしに対する口の利き方。

東能化

馬鹿ね、見習い期間の長いのが自慢になるとでも思ってるの。いつまでたっても昇進出来ないだけじゃないの。

西能化

あくそうですか、その言葉、甘んじて受けましょう。でもね、言つとくけどあんたも確実に、あたしと同じ道を辿ってるのよ。

東能化

あんたと同じ道、

西能化

そうよ、おんなじ万年見習いの道よ。

東能化

…まあ、それは、残念だけど…認めざるを得ない。

西能化

ざまあ、へっへっへっへ、

東能化

笑い事じゃないでしょ。

西能化

そうね、笑えないわよね。

東能化

見習いになって百九十年。

西能化

あたしなんてかれこれ二百六十年だもん。

東能化

六道能化と言えば人間界で言う地藏菩薩。

西能化

この黄泉の国で死者を引導し尊敬を集める尊い務めのはずなのに、

東能化

見習いの二文字がとれないばかりにいつまでたっても業報人のリスト作りや戒名整理。

西能化

あたしこの間、賽の河原でゴミ拾いなんかやらされちゃった。

東能化

閻魔様このところ環境保護に凝ってらっしゃるから。

西能化
いやね、何をやらされてもいいのよ。それがちゃんと昇進につながるんだったらね。

東能化
このままだったら、もう二、三百年経っても見習いのまかも知れないわね。

西能化
やめてよ、冗談じゃない。

東能化
考えただけで気が遠くなりそう。

西能化
あゝあ、つくづく普賢菩薩様がうらやましいわね。

東能化
ん、どうということ。

西能化
どうということって、

東能化
だから普賢菩薩様がどうしたって。

西能化
あらやだ、もしかして知らないの。

東能化

知らないから訊いてるんでしょう。

西能化

え、本当に。

東能化

だから何の話よ。

西能化

極楽浄土のサクセスストーリー、天上界のアメリカンドリームと言われたあの話を聞いたことのない見習い能化がいるなんて。

東能化

いいから話しなさい、（扇で西の頭を叩く）

西能化

いた、

東能化

早く話して。

西能化

分かったわよ。それはね、こういうことなの。今でこそお釈迦様の脇士で、あんなに立派な白象の上に鎮座します。普賢菩薩様も、私たち同様の見習い能化の時はずい

ぶんご苦勞なされたのよ。

東能化

へくそうなの。

西能化

そう、それが千五百年程前のある日、冤罪で餓鬼道に落とされそうになっていた男をお救いになり、その手柄によつてお釈迦様のお目にとまり、能化にご昇進なさったの。それから出世街道まっしぐら。今では、お釈迦様の左の脇士で知恵を司る文珠様と並び称され、右の脇士で天界下界の一切の理徳と長命の鍵を司る普賢菩薩様として榮華をほこつていらつしやるといふわけなの。

東能化

というと、当時あたし達みたいに能化見習いをなさつていた普賢菩薩様が、閻魔様の間違いにお気づきになり、そのお手柄で地藏菩薩にご昇進になり、延いては今の地位をお築きになつたということ。

西能化

その通り。

東能化

でも、それおかしな話ね。冤罪だなんて人間界の裁判じ

西能化
やあるまいし、まさか閻魔様のお裁きに間違いなんかあるわけではないでしょう。

西能化
だってそれがあるんだもん。もっとも確率で言うとな千年に一度くらいのことらしいんだけどね。

東能化
へえ、

西能化
何でも普賢菩薩様は、業報人のリスト整理をなさっていた時に、ある男に与えられる事になっていた戒名の画数とその男の生きている間の行状とどうしても合わないことから、これはおかしいってお気づきになったんです。

東能化
へえー、閻魔裁きとカボチャの花は、万に一つの外れなしって言うのに、ラッキーねえ。

西能化
羨ましい話よね。

東能化
……ねえ、あたし達もなんとか閻魔様のミスを見つけて、

西能化
お釈迦様に認めていただいて正式な能化に昇進させて
いただくってわけにはいかないかな。

西能化
何を馬鹿なこと言っているの。無理に決まっているじゃ
ない。

東能化
でもさ、

西能化
私たちみたいな落ちこぼれの見習いが、浜の真砂より多
い業報人の行状録の中から、鳳凰鳥の羽毛の先より細か
いミスをどうやって見つけることができるのよ。

東能化
まあ確かにあたしは落ちこぼれだし、お勤めにそんなに
熱心なわけじゃないけど、これでも退屈凌ぎに業報人の
生きている間の行状録だけは良く読んでる方よ。

西能化
かりにそうだととしても一年間にせいぜい千人分も読め
ればいいほうでしょ。地上に生きている人間だけでも何
人いると思っているの。それに閻魔様がお間違いになる
確率は、五千年に一度なのよ。

東能化

そうか、そうよねえ、無理よね。

西能化

もう少し自分たちを磨いて百年でも二百年でも時が来るのを待つしかないのよ。

東能化

確率は五千年に一度か：ちよつと待ってよ。あれはもしかして、

西能化

何よ。

東能化

いや、昨夜見た行状録の中にちよつと変わったのがあったんだけど、

西能化

またまた。だから言ってるでしょう、冤罪は五千年に一度しかないって。

東能化

それは分かったけど、ちよつとだけ見てよ。(積み上げられた行状録の中から一冊を取り出す)ええつと、ああ、これこれ、これよ。(二人で行状録を覗き込む)男の名、

天豹。

西能化

齡二十八にして残せし寿命十八年。何よ、この男、業報人特Aランクで、餓鬼道や畜生道も通り越して三悪道の一番下、地獄へ堕ちることが確定してゐるじゃないの。

東能化

その通り。だけど驚いたことにこの男、今だかつて人を殺めたことは一度もないのよ。

西能化

ええ、嘘でしょう。だって地獄に落とされる業報人は、

東能化

そう、人の命を奪った者だけ。

西能化

ちよつと見せてよ。(行状録を奪い取る)：やっぱり、こんなことだと思つたわ。ちゃんとここに但し書きがしてあるじゃない。閻魔様の朱印まで押してあるわ。その尋常ならざる粗暴なる行ないと、仏の哀れみの情を以てしても覆い尽くせぬ神仏を汚せる言葉の数々により、もはや畜生道、餓鬼道にも入る能わずって。つまりこれは特例だつてことで、冤罪なんかじゃないのよ。

東能化

それくらいあたしにだって分かるよ。だけどさ、厳密に言うところの男、地獄に堕ちる条件を満たしていないわけでしょ、何とかならないかな。

西能化

何とかって、まさか、この男の運命を変えようって言うの。

東能化

そう、冤罪じゃないけどあたし達の力で何とか出来るものならさ。

西能化

そんなことして見つかったらどうなると思ってるの。

東能化

失敗したらお咎めだろうけど、上手く行けば問題ないって。こういうことは結果オーライなんだから。お釈迦様だって一人でも多くの業報人が救われることをお望みなんだし、

西能化

そんなの無理。この男は絶対に立ち直らないから地獄に堕ちることが決まってるのよ。

東能化

それがね、いま閃いたんだけどさ、あたしにいい考えがあんのよ。

西能化

駄目よ。そんなことしたら、見習い能化の位も棒に振ることになるわよ。

東能化

じゃあ、いつになるかも分からないまま百年も二百年も待って言うの。

西能化

…それは…。

東能化

でしょ、とにかくこの業報人、天豹っていう男を見てみようよ。

西能化

…う、うん。見るだけ、見てみようか。

東能化

そうこなくっちゃ。(能化達、二人で下界を覗き込む) いい、ほら、見えるでしょう。

西能化

見える。あの男なのね。やっぱり悪人面してるわよ。

(暗転)

浜辺。神に祈りを捧げる老人。傍らには捕ったばかりの魚一匹と、地引き網。

老人

竜神様、思し召しにより長らえさせていただけいておりますこの命に感謝いたします。今日も一日の糧をお与えくださりありがとうございます。こだら年寄りの罪深き身に、過分なるお恵みを感謝申し上げます。御心のままの齢が尽きるまで漁の網を引かせて頂くことだけを願ひ奉ります。 (老人、平伏して無言で祈り続ける)

天豹

(下手より登場。老人の獲物に気づく) ほうほうほう、丁度腹が減ったところに、こいつあ詭え向きの旨そうなスズキじゃねえか (魚を取る)

老人

あ、て、て、天豹、何するだ。

天豹

何するもかにするも、魚は喰らうに決まってるだろ。

老人

け、け、け、け、けえせ。年寄りが半日網打ってやつとかかった獲物を、

天豹

(からかって真似)け、け、け、け、け、けえせるか、こちとら腹が減ってるんだ。腕づくで取り返してみるかジジイ。

老人

後生だ天豹、けえしてくれ。は半分だけでもええ。けえしてくれ。わしはええだが竜神様に約束しただ。獲れた獲物の半分は祠にお供えせねばなんねえ。おめえだつて罰当たりなことはしたくはあんめい。

天豹

竜神様だ、笑わせるねえ。魚が獲れたらさつさとけえればいいものを、馬鹿くせえ祈りなんぞしているからこうなるんだよ。

老人

そだからことぬかして今に神仏の崇りにあうだぞ。

天豹

いかジジイ、この天豹様は神も仏も信じねえ。信じねえもんにゃ、神仏の崇りなんざ恐かねえ。罰が当たるかどうか試しにてめえの首でもへし折ってみるか。(天豹、老人に掴みかかる)

老人

な、何するだ。やめれ、やめれ、

天豹

(老人の首を絞めながら) どうだジジイ、このまま楽になりてえか。

老人

くく、苦しいだ。は、放してけれ、

天豹

どうしたんだよ。てめえの親分の竜神様は助けに来ねえじゃねえか。

老人

くく、苦しいだ。勘弁してけれ。

天豹

分かったかジジイ。この世にゃ神も仏もありやしねえ。そんなものは屁の突っ支い棒にもなりやしねえんだよ。

老人

うう、苦しい。勘弁してけれ。助けてけれ。

天豹

ようし、助けて欲しけりや、この世には神も仏もござい
ませんと言ってみろ。

老人

うう、そだらなことは、

天豹

言えねえってのかよ。(首を絞める手に力を入れる)

老人

分かっただ、分かっただ。

天豹

早く言え。この世には神も仏もございませんだ。

老人

ここ、この世には：うう、

天豹

神も仏も、

老人

う、う、う、

(上手より儀傑登場。天豹を蹴飛ばす)

天豹

てー、誰だこの野郎。儀傑、てめえ(殴りかかるが体を交わされ転んでしまう)くそう、この天豹様に逆らうとはいい度胸じゃねえか。足腰立たねえようにしてやるぜ。(拳を振り回すがごとごとく空振り)

儀傑

どうした、喧嘩が自慢の天豹もその程度か。

天豹

こいつ、(殴りかかった手を後にねじあげられる)いてて、何しやがるんだ、放せ、放しやがれ。

儀傑

爺さんに謝れ。

天豹

やなこった。

儀傑

謝らないか。(腕を絞めあげる)

天豹

て、て、て、て、分かった、分かった。爺さん、爺

さん済まなかつた。

儀傑

爺さん、ケガはないか。

老人

わしは大丈夫だ、ありがとう儀傑。おかげで助かつただ。もう天豹は放してやってけれ。

天豹

いてえよ、骨が折れちまうよ。

儀傑

そういうわけにはいかねえ。こいつがまたあちこちで悪さしているから、ちつとばかり懲らしめてくれって村の衆に頼まれたんだ。しばらく暴れられないようにこの腕一本折っておかないとな。

天豹

ちよ、ちよつと待ってくれよ。腕なんか折られたら、明日から漁にも出れなくなるし畑仕事もできなくなつまうよ。

儀傑

笑わせるな。五体満足でもお前が働いてるところなんざ見たことはねえよ。

天豹
お。

老人

儀傑、許してやってけれ。腕なんぞ折ってしまつたら嫌われ者のこいつには飯を恵んでくれる者もいねえから、それこそ飢え死にしかねえ。

儀傑

死んでくれればそれ程ありがてえことはない。こんな悪たれが死んだら村中の人間が枕を高くして眠れるつてもんだ。

老人

儀傑、そだらなこと言わねえで勘弁してやってけれ。

天豹

爺さん、もういいよ。これはきつと竜神様に罰当たりなことを言った祟りだ。今やつとわかつたよ。神仏はちやんと俺の悪行をお見通しだったんだ。俺は自分が恥ずかしい。儀傑の兄貴、覚悟は決めた。片腕なんて言わずにここで一思いに殺してくれ。いや俺なんざ殺されても当然なんだ。

老人

分かってくれりゃあ何よりだ。

天豹

(しやがんだまま) 儀傑の兄貴、

儀傑

なんだ。

天豹

お詫びのしるしだ。つまらない物だが、これを(懐に手を突っ込もうとするが)いて、て、て、ダメだ。力が強えから、腕がしびれちまつてる。すまないが兄貴、懐のものを取ってくれねえか。

儀傑

なんだよ、俺はお前が分かりやそれでいいんだよ。(言いながら天豹の懐に手をやろうとする)何をくれようってんだい。

天豹

ほんのお詫びの、(砂を掴み儀傑の目に投げつける)しるしだっ。

儀傑

何しやがんでえ、

目を押さえてうづくまる儀傑に天豹が膝蹴りを食らわす。腹を押さえた儀傑の背に肘を落とし、続けて下から蹴り上げる。たまらず倒れ込む儀傑の腕を馬乗りになつ天豹が絞め上げる。儀傑声をあげて苦しがる。

老人

やめれ、やめれ（天豹を儀傑から引き離そうとする）

天豹

殺されてえかジジイ、（爺さんを付突き飛ばす。爺さん、突き飛ばされワナワナと震えている）儀傑、ざまあねえな。

儀傑

うう、卑怯だぞ、天豹。

天豹

馬鹿野郎、喧嘩に油断は禁物だ。情けをかけるなんざ愚の骨頂よ。それからもう一つ、肝心なことを教えてやろう。相手を組み敷いたら後から仕返しなんかされねえように二度と喧嘩の出来ねえ体にしてやるんだ。ほら、こんな具合によ。

儀傑の肩を膝で押さえて、手首を地面に押しつけ近くに転がっていた石を拾い儀傑の手の甲の上に振り上げる。

老人 やめれ、天豹、

(暗転、)

天豹(声) 恨むんだったら、てめえの間抜けさを恨め、

闇の中に儀傑の手を石で打ち付ける音と、儀傑の悲鳴が響く。

老人(声) やめれ、やめれ、

東・西能化、(遠くに聞こえる声) やめて、やめて、

黄泉の国、下界を覗き込んでる西能化人。

東・西能化 やめて、やめて、

西能化 (顔を上げ、東能化を見る。) あんな男助けられるわけ

ないでしょう。

東能化

思ってた以上に、ひどい奴ね。

西能化

無理、あの男だけは。気分が悪くなっちゃた。

東能化

確かに：：想像以上だね。

西能化

諦めましょう。

東能化

そういう訳にはいかないでしょ。めったにないチャンスなんだから。

西能化

他の誰かならともかく、あの男には可能性が皆無。業報人の典型じゃないの。

東能化

じゃあこのままで、いつまでも時が来るのを待つっての。もしかしたら永遠に見習いのままかもしれないのよ。

西能化

：うくん、それもいやだけど、

東能化

だから、あたしにいい考えがあるんだって。あの男が業報人の典型なら、聖人の典型、人間界の観音菩薩と言われている明蘭のことは知ってるでしょう。

西能化

明蘭って、南蹄山の。

東能化

そう、南蹄山の天女と呼ばれている明蘭よ。

西能化

五千年毎に選ばれる三聖女の一人で、こちらの世界へ来たら能化の位なんか通り越して、すぐにもお釈迦様の元呼び寄せられるだろうって言われているあの明蘭でしょう。それがどうしたのよ。天上界の神々と同じくらい高貴な霊を持つ彼女と、業報人特Aランクの天豹とどんな関係があるのよ。話しが繋がらないじゃないの。

東能化

そう思うでしょ、それが見習い能化の浅はかさなのよ。

西能化

だから自分だって見習いでしょ。

東能化

そうカリカリしないで、最後まで話を聞きなさいって。

西能化

まったく。

東能化

明蘭の類い希なる美しさはその姿形だけではなく彼女の魂の根底にまで及ぶのよ。明蘭が髪に飾るのは赤い仏桑花の花。だけど心優しい明蘭は咲いている花を手折ったりはしない。一度萎れて地に落ちた花を、そつと優しく手に取るのよ。するとどうでしょう、

西能化

知ってる、知ってるわよ。萎れていた筈のその花が、明蘭のあまりの美しさにもう一度真赤に花開くのよね。

東能化

天界下界の隔たりを超越した美と、森羅万象を包み込む清らかな心のなせる業よ。

西能化

あく近いものがあるだけに私にもよく分かるわ。

東能化

よく言うよ。

西能化

でもやっぱり、あの男天豹とはどう考えても繋がらない

じゃないの。

東能化

例えれば天豹は萎れた花よ。放っておけば地に落ちて腐るしかない。いや、人間としてはもう既に腐りきってしまっている。だけでもし、明蘭が手に取ってくれたら、美しく花開くかも知れないってことよ。

西能化

明蘭が手に取るって、

東能化

つまり、天豹が明蘭に出会う状況を作ってやれば、もしかしたら明蘭の清らかさに影響されて天豹だって生活を改めるかも知れないじゃない。

西能化

ちよつと待ってよ。あんたのたくらみが見えてきたよ。

東能化

あれ、どういう意味かな。

西能化
ね。

あんた、天豹が明蘭を好きになるように仕向けるつもり

東能化

仕向けるなんて人聞きの悪い、そのところは成り行きよ。もつともその可能性はすこぶる高いわね。何しろこれまで明蘭に出会って彼女を好きにならなかつた男なんていないから。

西能化

そんなことをして、逆に天豹の悪い影響で明蘭の運命を狂わせるようなことになったらどうするのよ。例えば、明蘭が天豹を好きになったりして、天豹と同じような人間になってしまったら。

東能化

そんな心配はいらないわよ。明蘭が天豹を好きになるなんてことは絶対はない。明蘭には天豹を魅きつける美しさがあるけど、天豹は明蘭にとって魅力的なものを何一つ持ち合わせていないんだから。

西能化

でも、どうやって二人を引き合わせるつもり。私たち見習い能化の力では人間を物理的に移動させたりはできないんですからね。

東能化

そこのよ、あたしがこのアイデアに何か運命的な必然

性を感じるのは。(天を仰ぐ)

西能化

また大げさに、

東能化

なんと天豹が住んでいる鑑の浜は、南蹄山の麓にあるの、これを運命と呼ぼずして何と呼びましようぞ。明蘭は半年前に病気がちだった母親が他界するまで、幼い時から母親の看病に明け暮れて遠出をすることなどなかった。かたや生来怠け者の天豹はいつも浜辺でぶらぶらしているだけ。たまに村に入って悪さをする事はあっても険しい獣路を一日かけて山里に出かけるなんて事は無い。だからこれまでに二人が出会う事は無かった。だけでもしその気になれば、お互いたかだか十里位の所に住んでいるのよ。

西能化

一言に十里と言っても、偶然に出会うのを期待できる距離じゃないわよ。

東能化

その通り。そしてあたし達見習い能化の力は限られている。現世に関わりを持てると言ったら、せいぜい人間の

心に少しばかり漠然とした考えを吹き込むくらいのことだけ、いわゆる、

西能化
虫の知らせ。だけどそんなことで本当に二人を引き会わせる事が出来るかな。

東能化
天豹だったら無理だけど、親孝行で信心深い明蘭なら間違いないと動いてくれるよ。

西能化
そんなにうまくいくかしら。

東能化
うまく行くかどうかは、見てのお楽しみさ。(暗転)

浜辺。下手より女物の着物を頭から被って天豹大笑いしながら飛び出してくる。虚雷も帯を持って転がるように躍り出る。

天豹
ハハハハハ、虚雷、あの後家さんの顔を見たかよ。

虚雷
見やしたとも兄貴。真っ青な顔してやした。

天豹

何でもしますから命ばかりはお助け下さいときやがった。歳も考えねえで派手な格好しやがって、裸にひん剥いてやったら一丁前にあくれくだよ。

嘘雷

兄貴、あの後家さん絶対に期待してやしたよ。

天豹

よせよ、あんな臺の立った姥桜、ヘドが出るぜ。

虚雷

兄貴は面食いだからな。

天豹

なんだ、虚雷おめえ、あの後家さんに気があったのか。おめえも随分下手物食いだなあ。

虚雷

な、何言ってるんですか兄貴、あんなババア。

天豹

今ならまだ、さっきの岩場で大口開けて泣いてるだろう。行って可愛がってこいよ。

虚雷

勘弁して下さいよ。

天豹

へっ、それにしてもなんだこの安物は。派手なだけでこれじゃあ飲代にもなりやしねえ。虚雷、ひとつ走り行って酒を調達してこいよ。

虚雷

調達って、兄貴、

天豹

かっぱらって来るんだよ。

虚雷

俺、一人でやるんですか。兄貴は、一緒じゃないんですか。

天豹

俺はここで待ってるよ。

虚雷

：：。

天豹

どうしたんだよ。

虚雷

俺一人じゃかっぱらいなんて。

天豹

馬鹿野郎、おめえは俺に弟子入りして一人前の悪党にな

りてえって言ったんじゃねえのか。かっばらいくらい一人で出来ねえでどうするんだよ。

虚雷

∴∴。

天豹

いいか悪事の修業はな、かっばらいに始まりかっばらいに終わるんだ。そりゃあ俺がやりゃあ簡単だが、それじやあおめえの修業にならねえだろ。

虚雷

だけど、兄貴、

天豹

虚雷、つべこべ言わずに早く行ってこい。俺は気が短けえんだ。

虚雷

は、はい。(慌てて、上手へ走り去る)

天豹

一人前の悪党になりてえだ。笑わせるねえ、てめえみてえな臆病者に勤まる程この道は甘くはねえんだよ。ま、

もう暫く鍛えてやって、少し使えるようになったら、奴をうまく捨て石にして、土蔵破りか何かでかいヤマを踏みやあいい。足手まといだが、それまでの辛抱と思えばしかたねえ。

蓮花
(下手より登場) 天豹。

天豹
ん、何だ、蓮花じゃねえか。暫く見ねえ内すつかり女っぽくなっちまったな。俺に何か用か。

蓮花
兄さんはどこ。

天豹
虚雷か、知らねえな。

蓮花
兄さんを家に帰して。

天豹
何の話だよ。

蓮花

隠さないで。兄さんがあんたの子分になったってみんな言ってる。

天豹

知らねえな。

蓮花

お願いだよ天豹、兄さんはあんたとは違う。弱虫で、一人では何もできないんだ。父さんも母さんも泣いてる。兄さんを家に帰しておくれよ。

天豹

けっ、奴が勝手につきまとっているだけだよ。俺の知ったことか。それより蓮花、おめえいくつになつたんだ。べっぴんになつちまつてよ。

蓮花

近寄るんじゃないよ。あたいはあんたみたいな悪党は大っ嫌いなんだ。

天豹

そうだ蓮花、この着物、おめえにやるよ。きれいだよ。よく似合うぜ。もうちよつとこつちへ来いよ。

蓮花

近寄るなって言ってるだろ。

天豹 分かったよ、なにもそう毛嫌いするこたあねえだろ。

蓮花 兄さんを返せ。

天豹 ああ、べっぴんさんに頼まれたらいやとは言えねえな。
(上手に向かつて) おい、虚雷、出て来いよ。

蓮花 兄さん、

天豹 おめえに会わせる顔がねえって、隠れてるんだよ。

蓮花 兄さん、(上手に行こうとして、天豹の前を通る)

天豹 待てよ。(蓮花の手を取り、抱き寄せる)

蓮花 な、何すんだ。放せ、放せ。

天豹 じたばたするねえ。(強引に唇を奪う。蓮花、抵抗しようとするが動けない。)

虚雷

(遠くから声) 兄貴、兄貴、

天豹

(蓮花を放す) ちえ、野暮なあんちゃんだな。(放心状態の蓮花に着物を掛けながら) そら、おめえによく似合うぜ。

虚雷

(上手より、徳利を持って登場) 兄貴、見てくれよ。(蓮花に気づき) お、何だよ。おめえこんな所で何やってるんだ。あ、その着物は、

天豹

俺がくれてやったんだよ。

虚雷

え、そいつはどうも。ちゃんと兄貴に礼は言ったか。

蓮花

兄さん、

虚雷

何だよ。連れ戻しに来たんなら俺は帰らないぜ。

天豹

虚雷、妹には優しくしてやんな。

虚雷

いいんですよ、こんなへちやむくれ。

蓮花

兄さんの馬鹿、(着物を捨て、下手へ走り去る)

虚雷

おい、何しやがんでい(慌てて着物を拾い)蓮花てめえ
：：すみませんね兄貴。

天豹

なあに、難しい年頃ってやつだろう。

虚雷

まったく、親の育て方が悪かったんだなあやあ。

天豹

おめえが言えた義理かよ。

虚雷

へへへへ、さいでした。

天豹

それにしても、やけに早かったじゃねえか。

虚雷

でしょう。任せてくださいよ。ほら、上物ですよ。

天豹

（徳利を受け取り、よく見る）うん、何だこの野郎。竜神の祠の御神酒じゃないか。楽しやがって、供物をくすねてきやがったな。

虚雷

あれ、やっぱり分かつちやいやしたか。面目ねえ。

天豹

いや、それでいいんだよ。悪事にや理屈も能書もいらねえ。要は結果だ。

虚雷

へい、

天豹

押し込みに入るんだったら、男手の多い屋敷より女子供が留守を守る家だ。

虚雷

なるほど。

天豹

同じ重さの巾着だったら、鎧を着けた武将より金持ちの年寄りから失敬するのが筋ってもんよ。

虚雷

一々もつともで。

天豹

(徳利の酒を一口飲んで) かーっ、うめえ。ほらっ(徳利を虚雷に渡す)

虚雷

ありがてえ。

天豹

人間なんてどいつもこいつも同じよ。腹の中覗き込みやあみんな真っ黒だ。無理して善人面さえしなけりや気楽なもんさ。

虚雷

まったく兄貴の言う通りだ。

天豹

こうやって飲みたいときに飲み、喰らいたい時に喰らう。

虚雷

天国でやすね。

(舞台上手に位牌を持って明蘭登場)

天豹

女を抱きたくなったら、(明蘭に気づき、言葉を止める)

虚雷

抱きたくなったら、

天豹

（明蘭を見ながら）飛びっ切りのふるいつきたくなるよ
うない女を抱くのさ。

虚雷

そいつばかりはそう都合良くは、（明蘭に気づく）兄貴、

天豹

今日はついてるぜ。

虚雷

飛び切りの美女でやすよ。

明蘭

お尋ねいたします。鏡の浜というのはこちらでございま
すか。

天豹

おい、虚雷、鏡の浜はここかとよ。

虚雷

（見とれて）は、はい、こちらでございます。

天豹

馬鹿、親切に教えてどうするんだよ。凄むんだよ。ビビ
らせて声も出せねえようにするんじゃねえか。

虚雷

さ、さいでした。すみません。(肩をいからせながら明蘭に近づき何か言おうとするが、明蘭の顔を見て慌てて天豹のもとに戻る) あ、兄貴、だ、だ、だ、駄目だ。

天豹

てめえがビビってどうするんだよ。

虚雷

ち、違うんだよ。兄貴、そ、そっくりなんだ。

天豹

そっくりって、誰にそっくりなんだよ。

虚雷

観音様。

天豹

なに、

虚雷

子供の頃、毎朝死んだ婆ちゃんに無理矢理手を合わせられた観音様の絵にそっくりなんだよ。なんかこう、神々しいって言うか、恐れ多いって言うか、それに位牌なんか持つてるし。

天豹 馬鹿、何寝惚けたこと言ってるんだい。俺が手本を見せてやるよ。

明蘭 (舞台中央に進み、感慨深げに海を見る) そうですか。こちらが鑑の浜でございますか。

天豹 女、何処の誰だか知らねえが、この浜のことを人に尋ねて来たんなら、ここを罫にしている天豹様のことも聞いただろう。

明蘭 : :。(振り返り微笑む)

天豹 (明蘭の美しさに、一瞬ひるんでしまう) : :つまりだ、その、なんだ、道の一つも尋ねたら、お節介な連中が話してくれただろう。おめえのような若い女がこの浜に近づけば、どういうことになるかってな。

明蘭 お節介な人たちではなく、とても親切な方々でしたが、はい、おっしゃる通りでございます。

天豹

この野郎、妙に落ち着き払ってやがる。だったら、何故こんな所にこのこやって来たんだ。身ぐるみ剥がれて手込めにされて、へたすりや命も危ねえってことは、覚悟の上ってことだなあ。

明蘭

私にはどうしても、この浜に来なければならぬ訳がございまして。一昨日の明け方、夢枕に亡くなった母が立ったのです。夢の中の母は、私に母の位牌を持って山を降り、鑑の浜という所に行つて欲しいと申します。生まれてから一度も山を降りたことのなかった母は、きつと話に聞いていた海というものを、見てみたかったのでございましょう。

天豹

そいつはなるほど泣かせる話だ。孝行娘は死んだ母親の供養のためなら、男のなぶりものになつても構わねえってことかい。

明蘭

私の生まれ育つた山里では、人が他の人間に危害を加えたり、他人の物を自分の物にしてしまうなどという話は聞いたこともございませんでした。ですからここへの道

天豹

すがらそのようなお話を聞いた時も、俄に実感がわかなかつたのでございます。何分無学な者ですから、お許し下さい。

な、なんだこの、調子が狂っちゃまうぜ。だったら何か、おめえの村じゃあ、盗人も追剥もいねえってのか。

明蘭

村と呼べますかどうか、十数軒の百姓家が肩を寄せる小さな山里で、皆家族同様の交わりをいたしております。畑の作物も織上がった反物も、その時に必要なものが利用するのでございますから、おっしゃるように、わざわざ盗む必要はございません。

天豹

そうか、分かつたぞ。親類縁者だけで固まって住んでいんで、世間の事を何も知らねえってわけだ。だったら教えてやろう。いいか、世の中にはな、よそ者が足を踏み入れちゃあならねえ場所があつて出会っちゃならねえ奴がいるんだ。そしておめえは、そんな地獄の一丁目に足を踏み込んだ。

明蘭

私の故郷の南蹄山では、他国の方がおいでになると皆が集まって歓迎の宴を開きますが、所変われば習わしも変わるのでございましょう。何分こちらの事は何一つ存知上げておりませんので、何卒宜しくお願いいたします。

天豹

こいつ…（絶句）

虚雷

兄貴、なんだか話が、噛み合ってませんよ。

天豹

くそ、頭のおかしな女を相手に御託を並べているほど俺は暇じゃねえんだ。虚雷、この女、だいぶいかれているようだが、確におっそろしい程べっぴんだ。構うこたあねえ、世の中の恐さを教えてやんな。

虚雷

えー兄貴、俺が、

天豹

たかが女一人に、何を怖じ気づいてやがんでえ。

虚雷

だって兄貴、俺、こんなに綺麗な眼をした女を見たのは初めてですよ。観音様とおんなじ眼をしてやすよ。

天豹

馬鹿野郎、俺は神仏なんざ信じねえ。おめえに出来なきや、俺がやってやる。よく見てろよ。

虚雷

兄貴、

(明蘭、静かに微笑んでいる)

天豹

この野郎、恐くねえのか……くそう。

明蘭

(微笑んで天豹を見つめているが、視線を落とす)あら、(天豹の足元にしゃがみこんで脚絆の結びに手をやる)この結び方は、良くないのですよ。

天豹

な、何しやがんでえ。

明蘭

動かないで下さい。すぐに済みますから。(脚絆の結びを直す)はい、これでよろしゅうございます。(立ち上がる)

天豹

：：（呆気にとられている）

明蘭

すみません。私の育った土地の風習でございませう。脚絆の紐の端をあのようにつぶすと、親の死目に会えないと言います。迷信とお笑いになるかも知れませんが、どうしても気になってしまふものですから。

天豹

：余計なことをしやがって、（脚絆を乱暴に解こうとするが、なかなか解けない）くそ、ふざけるんじゃないやねえよ。（座り込んで脚絆を解きます）親の死目に会えねえだ。はばかりながらこの天豹様には、生まれたときから親兄弟なんざいやしねえ。一人で生まれて、一人で死んでいくだけだ。くそ、くそ、（脚絆の結びを解く事より、心の動揺を隠すように）

明蘭、悲しげな顔で天豹を見つめているが、やがてその瞳に涙が溢れ出る。

天豹

（片方だけなかなか解けない）くそ、なんて結び方しや

がんでえ。解けやしねえ。くそ、くそ、

明蘭、静かに天豹に歩み寄り、気配に気付き立ち上がるうとした天豹を抱きしめる。

天豹

や、やめろ：（少し抵抗するがひざまづいた形で明蘭に抱かれたまま動かなくなる）

明蘭

（天豹の頭を抱き）寂しかったのですね：寂しかったのですね。

両手をだらりと垂らし、抱きすくめられたままの天豹。空ろな眼で遠くを見ているが、やがて低い声で絞り出すように泣き始める。

暗転